

Computer Report

Vol.57 No.11 11月号 (通巻758号)

はじめの言葉

■施政演説もなく解散された衆院選挙の結果は、予想以上の与党陣営圧勝の形で終わった。これも日本国民の主権表明の結果である。専門家によると、圧勝した与党勢力の絶対得票数から割り出される支持率からすると大きな懸念が浮上しているとされるが、現選挙制度の問題点指摘は別の問題である。民主主義の原点は、選挙制度を含めて多数決の論理で確認していくことであり、様々な問題点も含めて、全責任を国民が負うことである。

■果たして、国民はどこまで主権を発揮できたのか。安倍政権が成立させた、特定秘密保護法、安全保障関連法、共謀罪法など、本来的に国民の信を問うべきだった重要法案を、今回の選挙で是認したと見做されることだろうし、国民は、その責めを負うことになる。これも国民の義務である。聞くところによると、若い世代ほど安倍政権を支持しているという。高齢者よりも将来がある世代である。その責めをより長く背負うことになる。

■それにしても、安倍政権の暴走(?)を止めようと、かなり思い切った動きを見せた野党勢力だったが、見事に自爆した形で予想外の大敗を喫してしまった。解散権を持つ政権与党の抜き打ち解散だったこともあり、最大野党の民進党の動きは我が国選挙史上から見ても注目される決断を見せた。結果として、東京都知事代表の希望の党が政界再編をもたらす中核として注目された。憲政史上の政治的決断として記憶されることだろう。

■政治家たちにとってもそうだったが、主権者たる国民にとっても、今回の選挙は大いなる政治的決断を迫られた選挙だったと言える。その意味で大いにエキサイティングな選挙だった。衆院解散が宣言された直後の選挙機運の高まりは、選挙結果が国会首班に直結していると国民をして実感させたことの意義は大きかった。ただ惜しむらくは、野党結束が揺らいでしまい、無念にも投票日まで緊張感が維持できなかったことである。

■政治的決断／判断に疑問が残されることは常である。矛盾を包含しつつも、逼迫した情勢の中で、ひとつの決断／判断を下さなくてはならない時がある。すなわち、これこそが政治的決断／判断の時である。その意味で、前原民進党前党首、小池希望の党代表の決断を評価しておきたい。選挙結果とは別問題である。少なくとも、本気で政権奪取を指さない政党の綺麗ごと公約よりも数段上に評価できる。

■お粗末の一言は、当選初めての野党国会議員が、自身に何の実績もない身を顧みることなく、不遜にも野党執行部の責任を声高に追及する声明をぶち上げていたことである。こうした動きを見て、維新の党の法律顧問を橋下徹同党元代表が辞任した。その理由として、こんなバカが出て来た政党と付き合いられない由をツイートしたというが、尤もな反応だと言わざるを得ない。世の中広いとは言え、本物のバカがいることに驚く。

■問題は、絶対過半数を確保した安倍政権の国民監視である。森友／加計問題もさることながら、近隣周辺国情勢への対応、高齢化社会に向けた福祉政策など、国民の監視能力／機能を発揮させるべき課題は多い。大勝の後、謙虚な姿勢で臨み、丁寧な説明をする政権運営をしていくとした安倍首相だが、自民党若手議員からの要望として、与党議員の国会質問時間の大幅増／野党時間の大幅減を提案し始めた。予断を許さない。(藤見)